

司式 杉山昌樹牧師

奏楽 森永美保姉

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 5 : 1

1. めぐみゆたけき主を ほめたたえまつれ、そのみいつくしみは とわにたえせず。救われしみたまよ、おごそかにうたえ、「あわれみとまことはかわることなし」と。アーメン

* 開 会 祈 祷

罪 の 告 白 祈 祷 書 2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 祷 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 72 : 1

1. 「こころを高くあげよ!」。主のみ声にしたがい、ただ主のみを見あげて、こころを高くあげよう。アーメン

公同の祈禱 祈禱書16 復活節 第三主日 主の昇天

いのち しゆ かみ ふっかつ しゆ い え す
命の主なる神さま、復活の主イエスは、わたしたちに新しい命の住まいを備えるため
に、天に昇られたことを覚え、心から救いの御業をほめたたえます。主の昇天によつて、
わたし すく みち かんせい かんしゃ み な さんび
私たちの救いの道が完成したことを、感謝しつつ御名を賛美します。
あがな ぬし い え す きりすと いた みち しんり いのち
贖い主イエス・キリストこそ、まことに、あなたに至る道であり、真理であり、命で
あると告白します。主は今も生きておられ、世の終りまで、いつも私たちと共にいてく
ださることを感謝します。 (ヨハネ14、マタイ28)

献 金 (黒)・(赤) 中会回転基金 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

(子どもプログラム)

聖書朗読 ヨハネ13章31～35節 (新約聖書195頁)

説教・祈禱 「愛は見える」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 42:1、3

1 み恵み豊けき 主の手に引かれて、この世の旅路を 歩むぞうれしき。

(おりかえし)

たえ 妙なる御恵み 日に日に受けつつ、み跡を行くこそ こよなき幸なれ。

3 けわしきやまじ おぐら しゆ て やす すぎ
3. 険しき山路も、小暗き谷間も、主の手にすがりて 安けく過ぎまし。

(おりかえし) アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

てん 天にまします我らの父よ

ねが み な 願わくは御名をあがめさせたまえ

みくに き みこころ てん 御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

われ にちよう かつて きょう あた 我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

われ つみ おか もの われ ゆる われ つみ ゆる 我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

われ こころ あ あく すく いた 我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

くに ちから さか かぎ なんじ 国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 68

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。 アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

本日 受付1階：加藤良明・若月学執事 2階：藤井牧子執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週 受付1階：大日南隆夫・大日南信也執事 2階：森永美保執事 / ZOOMホスト・録音：門脇光生

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ヨハネ13：31-35 「愛は目に見える」

栄光

今日の聖書の中でまず目を止めたい言葉があります。それは、イエス様が語られる「栄光」です。しかも、ここでは4回も「栄光」と言っておられます。ご自身と神様とにかかわることとして、ちょうどキャッチボールをするように、イエス様が栄光を受け、それによって神様が栄光を受け、それによってまもなくイエス様がさらに栄光を受ける、というように、ある意味では親子の間で、栄光が行ったり来たりする様子が語られています。では、このような栄光は、私たちと関係があるのでしょうか。実は大いに関係あると私は考えています。私たちもこの栄光に関係があります。今日は、この意味で神様の栄光と私たちのあり方について一緒に考えたいのです。

今ということ

それで、少し順番を入れ替えて、33節にある言葉から考えていきます。それは「今」という言葉です。イエス様が、33節で、「いましばらく」と言われ、さらに「今、あなた方にも同じことを言うておく」と言われた「今」です。この今がどのようなものか、すでにご存じの通りですが、この所の状況はイエス様と弟子たちで過ぎ越しの食事をなし、その食卓の中で、イエス様を裏切る者となったユダに、その業をなすようにとの言葉が発せられた、その時のことでした。これは、イエス様にとっては、もう後戻りできない十字架への動きが始まっている、すでに引き金が引かれた「今」です。それと同時に、弟子たちにとっては、イエス様の行くところへ一緒についていくことができない、なお、世にとどまって生きていく、そのようなことが始まる「今」です。そして、これは、私たちにとっても共有できる「今」です。今、あなたはどこにいるのか、どこで、どのように生きているのか、と問われれば、私たちは、このふじみ野市周辺に住んでいて、家庭を持っていたり、仕事を持っていたり、とにかく忙しく生活をしている今があるのです。そのような今、イエス様と同じ場所にはいない「今」、そんな私たちの「今」が、これから、どうなるのが、この所で語られている言葉と関係します。

子たちよ

その場合にこのところのもう一つの言葉から聞いたのです。33節冒頭のイエス様による「子たちよ」という呼びかけです。これはこの時食事を共にした11人の弟子たちに対する言葉ですけれども、それだけではありません。この聖書を読む私たち皆にとってのイエス様からの呼びかけです。それはイエス様と弟子たち、あるいは、私たちとの間の強い結びつきを示しています。親は、子どもがいくつになっても子どもの歩みを心配してしまいます。私自

身、高校生の息子をどこかしら心配しているところがあります。そのようなきずなで、イエス様と弟子たち、そして私たちは結ばれているのだ、とイエス様は言われます。いっぼうで、すでに確認しました通り、「私が行くところにあなたがたたちは来ることができない」のですから、弟子たち、そして私たちともある隔たりがあるということが語られているのです。イエス様をしたって、こひつじのように、幼子のように、後をくつついて歩くことが、もう、できないように見えるのです。しかし、実は、そうではないということこそ、今日の聖書の大切な点です。むしろ新しく始まるのです。

イエスの栄光と我々

そのような新しい始まりは、ただ、神様のご計画が実現することによって可能になります。今日の聖書は大きく分けますと、31、32節と、33-35節に分けられるとすでに確認しました。そして、33節から語られていることによって、イエス様と離れているけれども、一緒にいる、ということが実現していくのです。けれども、それをしっかりと理解するためには、実は、この31、32節が大切な意味を持っています。そこで語られておりますのは、神様の栄光であり、イエス様の栄光でした。その栄光がすでに表れた、とイエス様は言われます。31節で「今や、人の子は栄光を受けた」。ここでも、「今」があります。イエス様の今は、すでに確認した通りですが、もう少しはっきりと言いますと、イスカリオテ・ユダに向かって「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」（13：27）と語り掛けたときに、いわば引き金が引かれた、十字架に向かう道のりです。この後イエス様は、夜中に捕らえられ、二つの裁判があり、最後には十字架につかれる、ということもまたご存じの通りです。そして、十字架の上でイエス様が「成し遂げられた」と言われたときに、神様のご計画された、私たちの救いは完成しました。私たちの罪の呪いがすべてイエス様によって引き受けられて、私たちは、神様に、父よ、と呼びかけることができるものとして、神様の前に立てるようになったのです。そして、このような救いの完成が神様とイエス様の栄光の表れなの言うまでもありません。しかし、それで終わらないのです。なぜなら、私たちが神様の前に立つとは、私たちもまた、神様の栄光の中に包まれている、あるいは、わたしたちが神様のものになっていることだからです。もっと言えば、私たち自身が神様の栄光の表れなのです。その点で気恥ずかしがる必要はないのです。私たちは神様の栄光の一部です。

らしさ？

しかし、そこで、「我々は神様の栄光を表す神様の民だ」と胸を張って言い切れるかとふと自分に問うと、ちょっとどうだろうか、と思ってしまうところがあるかもしれません。ある祈りの本に書いてあったことですが、まだ若い青年が第一コリント13章の愛のこぼを自分に当てはめて書いてみたそうです。とても有名な言葉で私がキリスト教に関心を持つようになったきっかけの言葉でもあるのですが、その始まりはこうでした。「愛は忍耐強い、愛は情け深い、ねたまない、愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない」とまだ続きますけれども、この程度にしまして、この「愛」の所に、「僕」を入れてみたらどうか、という話です。「僕は忍耐強い、僕は情け深い」と言えればいいのですが、どうも実際のところは「僕は忍耐強くない、僕は情け深くない、ねたま、僕は自慢する」と続いてしまいような気がして、ああ、自分は罪があるな、と感じてしまうというのです。これは他人ごとではなく、私自身、まじめに自らを省みて、一つ一つ数え上げれば、ああ、あの時、短気に怒っていなかったか、あの時傲慢に、うぬぼれていなかったかと、思い当たることだらけです。けれども、そこで、こんな自分は栄光の

器ではない、と自分で勝手に決めてはいけなと、イエス様は言われているのではないのでしょうか。そうではないと私たちに呼び掛けておられるのです。それが、先ほど確認した、子たちよ、という呼びかけです。何しろ、子なのです。それは、神様の子、という呼びかけです。あなたたちは神様の子だ、栄光の神様の子だ、という呼びかけです。

新しい掟

そしてそれに続いて「新しい掟」ということが言われるのです。その掟は愛の掟です。しかし、「新しい」と言います。「愛」事態は、聖書において一貫して変わらない掟です。神様ご自身が愛であるかたです。旧約聖書においてすでに、隣人愛が示されていました。もっとも有名なものとしては、イエス様が、最も大切な戒めの二つ目として取り上げられたレビ記19章の言葉があります。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」（レビ19：18）。主の戒めとして、神様への恐れをもって、復讐を捨て、恨みを捨て、隣人を無条件に愛することが命じられていました。これは今でも私たちの課題であり、祈り求めるべき生き方です。隣人を本当に分け隔てせず、教会を無視し、むしろ馬鹿にしているような人のためにこそとりなしていく、そんな姿勢が求められているのです。それを、今この時から新しく生き始めるというのです。だから、「新しい掟」です。そして、この「掟」こそがイエス様と私たちを結び付けていくのです。その内容は単純です。「互いに愛し合いなさい」だけです。その際、お手本があります。イエス様ご自身がお手本だと言われるのです。そして、それはまさに弟子たちの目の前で、今しがた行われた、全く新しい出来事であったのです。いうまでもありません。イエス様が弟子たちの足を洗われたあの出来事です。

イエスの愛

食事の席に着く前の弟子たちの汚れた足を一つ一つ丁寧に洗って、手ぬぐいで拭いて、さあ、きれいになった、あなたの存在全体がきれいになった、よかったなあ、といって微笑みかけるような、そんな愛です。このことに関しては、イエス様ご自身が、15節でこのように言われていました。「13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。 13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」イエス様が弟子たちの足を洗ったのは、弟子たちも同じようにするためだった、私がした通りにあなた方もしてほしいのだ、とはっきりと言われました。先ほど、どのような人でも隣人であれば愛を注ぐ、というようなことをお話しましたが、その根本にあるのは、まず、教会員同士なのだ、ということになります。ほかでもない教会に集まる私たち同士がどうであるのかが問われるのです。

互いに愛し合うとは

それでこれも率直に言うしかないのですが、わたし自身はすでに先ほどお話した通り、あまり格好良くないところがあります。すぐに怒ったり、思い上がったりしやすいものです。それで、あえてお許しただけければ、人間には誰でも、あまり格好良くない部分があるのではないのでしょうか。けれども、この新しい戒めには、それを超えていく力があるのです。なぜなら、この掟の根本的な根拠として、「私があなた方を愛したように」という言葉があるからです。復活の後のことを思い出していただきましたのです。先々週お話ししました、漁をするペテロたちの所をまず訪ねてくださったのはイエス様でした。食事に招いてくだ

さったのはイエス様でした。食事の後で、「私を愛するか」と三度も訪ねて、ペテロを作り替えてくださったのはイエス様でした。このようにして、今も、聖書を通して語り掛けて下さるイエス様によって私たちが作り変えられて、本当に神様の子となっていることが分かるなら、そして、私たちの中にイエス様が働いてくださっていることが分かるなら、私たちもまた、この掟に生きるもへと変えられていくのです。その時にこそ、「イエス様が愛したように」「互いに愛し合う」ということが実現していくのです。

しるしとしての愛—愛は目に見える

そして、そのようにして、わたしたちが、たとえごちなくとも、互いに愛し合うことに生きていくのなら、それはこの教会だけでは終わらないのです。わたしたちが互いに足を洗うことに象徴されるような、お互いに仕え合うような生き方へと近づきます時に、私たち自身が一つの香り（2コリ2：15、16）を放つようになるのです。それが35節に描かれていることです。「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るようになる」。この「皆」に何らかの限定はありません。教会の外にいる人が誰も皆という意味です。教会が本物であること、聖書に書かれた通り、イエス様の愛に生きる人たちがいることが、明らかになっていくのです。そして私たち自身によって、この教会を通して愛が見えるものになるのです。

祈り

今もすべてをご支配される私たちの父なる神様。あなたを父と呼ぶことができ、わたしたちがあなたのご栄光を表す器としてすでにたてられておりますことを覚えて感謝します。とりわけあなたは私たちに主イエスによって新しい生き方を示してくださいました。わたしたちが互いに愛し合います時に、その所で主イエスが証され、あなたの御心になり、そのようにしてあなたのご栄光が現れます。どうぞ私たちをこのような愛に生きる器としてさらに整え用いてくださいますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。